



おたふくかぜワクチン

おたふくかぜ（流行性耳下腺炎、ムンプス）ワクチン

B-08

🐣 どんな病気ですか？

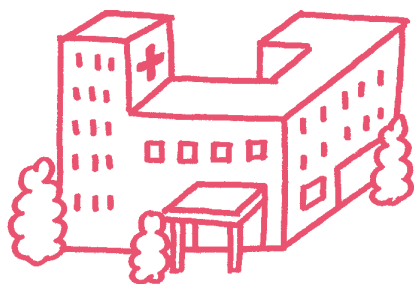
おたふくかぜ（流行性耳下腺炎、ムンプス）の主な症状は、発熱と唾液腺（特に耳下腺）のはれ・痛みです。感染した人の約3割は感染しても明らかな症状がでません。唾液腺のはれは、症状が出始めて1～3日がピークで、1週間ほどで良くなります。痛みは唾液の分泌により強くなります。発熱は数日続き、頭痛、倦怠感、食欲減退、筋肉痛、首の痛みなどを伴うことがあります。



おたふくかぜは軽い病気と思われがちですが、実際には様々な合併症を伴うことがあります。髄膜炎や脳炎・脳症などの神経の合併症がみられます。髄膜炎は10～100人に一人の割合でみられます。脳炎・脳症の合併は稀ですが、後遺症を残すことがあり、時に死に至る場合もあります。他にも難聴（1,000人に1人の割合）や精巣炎・卵巣炎・脾炎（すいえん）などの合併症があります。妊婦が感染すると流産の危険率が高くなります。

国内では、毎年子どもを中心に数十万～百万人がかかり、5,000人程度が入院していると報告されています。

また、日本耳鼻咽喉科学会の調査では、2015～16年の2年間に少なくとも348人がムンプス難聴となり、両耳難聴16例を含む300人近くに後遺症が残ったと報告されています。



🐣 ワクチンをいつ、何回接種しますか？

1回目



1歳になったら早めに

2回目



小学校入学前の1年間

おたふくかぜワクチンは計2回の接種が推奨されています。1回接種のみでは予防効果は十分ではありません。このワクチンを定期接種に導入している国の多くは2回接種をしています。

日本小児科学会は、1回目を1歳になったら早目に、2回目を小学校入学前の1年間に接種することを推奨しています。

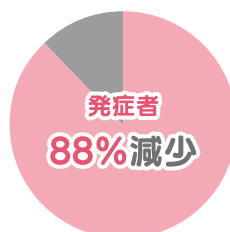
妊娠早期におたふくかぜにかかると自然流産を増加させる可能性があります。成人女性にワクチンを接種する場合は妊娠していないことを確認します。



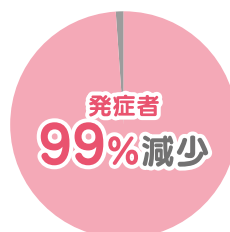
🐣 ワクチンの効果

おたふくかぜワクチンを1回定期接種している国ではおたふくかぜの発症者数は88%減少し、2回定期接種している国では99%減少しています。高い2回

1回定期接種している国



2回定期接種している国



（ワクチン導入以前の発症者数を100%とした）

接種率を維持しているフィンランドでは、1996年におたふくかぜの排除宣言をしています。接種率が向上すればおたふくかぜの流行は小さくなり、脳炎・脳症、難聴、精巣炎や卵巣炎などの重篤な合併症も少なくなります。

ワクチンの副反応

おたふくかぜワクチンによる副反応として、接種後10～14日後に微熱が出たり耳の下、頬の後ろ、あごの下などがはれる場合がありますが、自然に治ります。接種後3週間前後に、おたふくかぜワクチンが原因の **無菌性髄膜炎** が、40,000接種あたり1人程度発生するとされています。ただし、おたふくかぜにかかった場合に比較してその頻度は低く、程度も軽いです。

その他、ワクチン接種との関連性が疑われるものとして、アナフィラキシー（重いアレルギー反応）、血小板減少性紫斑病、難聴、精巣炎などが報告されています。



どのように感染しますか？

おたふくかぜはムンプスウイルスの感染症で、主に唾液を介して人から人に感染します。耳の下、頬の後ろ、あごの下がはれる6日前から、はれてから9日後頃まで唾液の中にウイルスが出ているので、この間



飛沫感染

咳やくしゃみで飛び散った病原体を吸い込んで感染

は、唾液が感染する原因になります。

ウイルスはまずのどの入り口に感染してそこで増え、増えたウイルスが血液に入って全身に回り、唾液腺（つばを出す腺）、髄膜（脳や脊髄を包んでいる膜）、脾臓、精巣、卵巣、甲状腺、腎臓、中枢神経（脳などの神経の細胞が集まっているところ）などに達します。

そこで再びウイルスが増えて唾液腺の炎症やさまざまな合併症を引き起こします。潜伏期間は12～25日（多くは14～18日）です。

♥ ワクチンが接種できない人は誰ですか？



接種を受けることができない、 いわゆる接種禁忌の人

- 明らかな発熱を認めた場合
- 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな者
- ワクチンの成分によってアナフィラキシー（重いアレルギー反応）を起こしたことがある場合
- 免疫機能に異常があったり、免疫機能を抑える治療を受けている場合（免疫抑制剤など）
- 上記以外で予防接種を行うことが不適当な場合

*輸血またはガンマグロブリン製剤の投与を受けた人は、接種しても免疫が十分に獲得できないため、通常3か月以上の間隔をあけてから受けます。

*川崎病や血小板減少性紫斑病などの治療でガンマグロブリン大量療法（200mg/kg以上）を受けた場合は、6か月以上の間隔をあけます。



接種を受けるにあたって注意が必要な人 接種前にかかりつけ医によく相談しましょう

- 心臓・血管・腎臓・肝臓・血液に持病がある人、発育に障害がある人
- これまでの予防接種で接種後2日以内に発熱や全身性発疹等のアレルギーを疑う症状を認めた人
- 過去にけいれんの既往がある人
- 過去に免疫不全の診断がなされている人
- 先天性免疫不全症の病気をもっている近親者がいる人
- ワクチンの成分に対してアレルギー反応を起こすおそれのある人

